

平成21年度

国土交通省高知西バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

天神溝田遺跡

記者発表及び現地説明会資料



バイパス橋梁工事が進むいの町天神地区東上空より

日時 記者発表 平成21年9月10日(木) 午前10:30～11:30
現地説明会 平成21年9月12日(土) 午後1:30～3:00

場所 いの町天神の発掘調査現場

高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

I 調査の概要

1 調査の目的

今回の発掘調査は、国土交通省が計画している高知西バイパス建設に伴う発掘調査であり、事前の発掘調査を実施して遺跡の内容を記録し、地域の歴史復元に役立てようとするものです。

2 事業主体

国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所

3 調査機関

調査主体 高知県教育委員会

調査実施機関 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

4 調査場所

高知県吾川郡いの町字伊野天神東他

5 調査期間

平成20年度 平成21年1月14日～平成21年3月25日

平成21年度 平成21年4月25日～平成21年9月30日

6 調査面積

調査延べ面積 4,831 m² (平成20年度1,131 m²、平成21年度3,700 m²)

7 調査協力

国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、いの町教育委員会

8 天神溝田遺跡の概要

天神溝田遺跡は、仁淀川の支流宇治川河口付近に位置し、昭和36年に宇治川の改修工事の際、弥生時代の銅剣、銅戈(昭和41年いの町指定有形文化財)が発見されたことから弥生時代の遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地になりました。また、平成18年度に実施した西バイパス建設に伴う事前の試掘調査では、音竹城跡が立地する丘陵裾部を中心に古代(奈良～平安時代)の遺構と遺物が確認され、上層からも中世から近世にかけての遺物の出土が認められたため、周知の遺跡が広範囲に及ぶことが明らかとなりました。

遺跡周辺には、天神遺跡や塔の向遺跡、弥生時代の高地性集落であるバーガ森北斜面遺跡などが所在しており、いの町中心部の中でも数多くの遺跡が集中しています。

平成20年度には、いの町の町道奥名西線道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代から近世にかけて多岐にわたる遺構と遺物が発見され、天神溝田遺跡の詳細な時期や性格を知る上で貴重な成果が得られています。

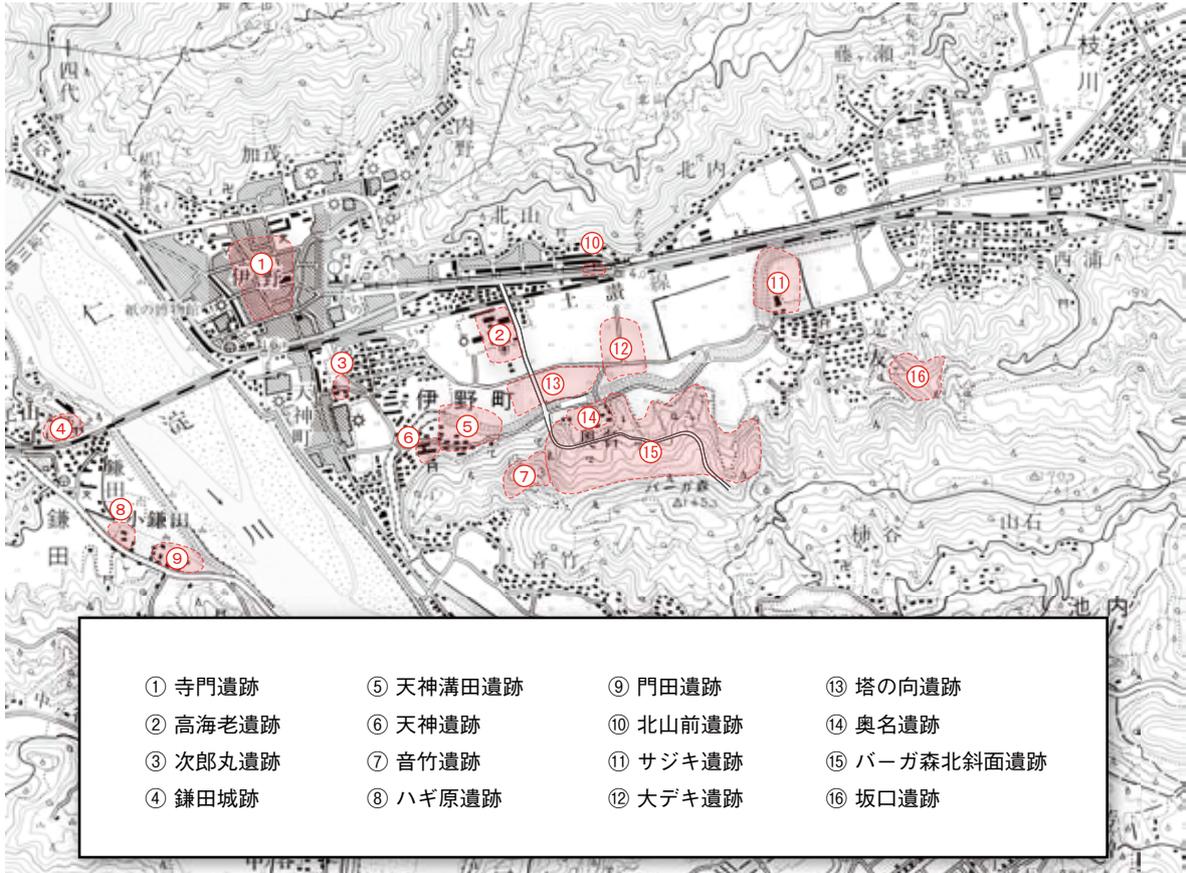
II 調査の成果

1 平成20年度調査 I 区(古代・中世・近世) 調査面積 1,131 m²

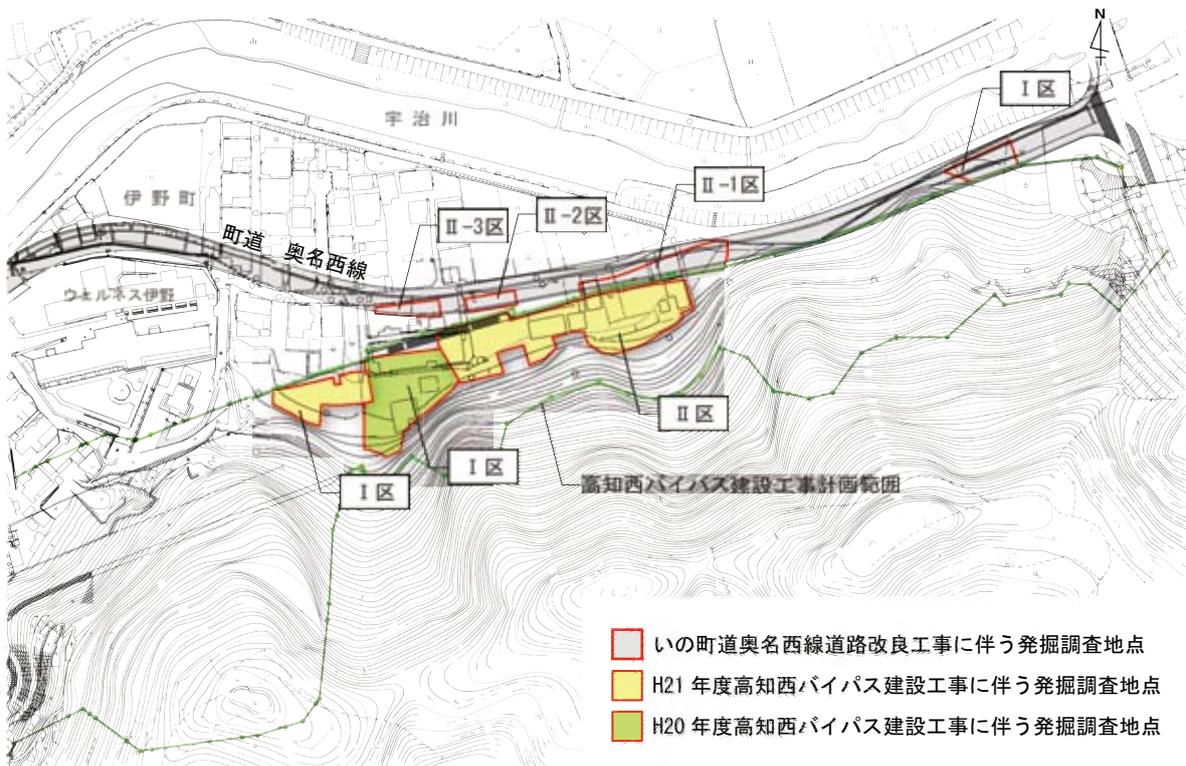
平成20年度調査では、上層で近世(江戸時代)初期の屋敷跡が確認されました。掘立柱建物跡や土坑、屋敷跡を区画するとみられる溝、それに平行する柵列などが検出され、地元の尾戸焼や、唐津、伊万里焼などの生活道具が出土しました。下層では、平安時代後期の建物の柱穴と思われるピットや土坑が検出され、中には椀状鉄滓と呼ばれる鍛冶に関連する遺物も出土しています。

(1) 検出遺構

掘立柱建物跡3棟、柵列4条、土坑22基、溝15条、ピット(柱穴)648個



いの町周辺の遺跡分布図 S : 1/25000



(2) 出土遺物

近 世：近世陶磁器183点(唐津・伊万里)

中 世：土師質土器330点、古瀬戸4点(灰釉皿・梅瓶・天目)、備前焼8点(播鉢・甕)、貿易陶磁器20点(青磁・青花)、瓦質土器4点(鍋・鉢)

古 代：土師器1,442点(杯・皿・甕・羽釜)、須恵器37点(杯・皿・甕)、緑釉陶器5点(皿)、黒色土器22点(碗)

その他：鉄滓、鉄釘、砥石など

2 平成21年度調査Ⅰ区(弥生・古代・近世) 調査面積 1,398㎡(延べ面積)

今年度の調査Ⅰ区は平成20年度調査Ⅰ区の西側に隣接し、上層では平成20年度調査Ⅰ区で検出された近世の屋敷跡の一部が検出されました。北限を区画する溝(SD2)からは瀬戸織部の向付皿が出土し、江戸時代初期の屋敷跡の様相を知る事が出来ます。また、下層では弥生時代後期後半の土器が集中して出土し、土器の出土状況から調査区周辺に生活場所の広がりが想定されます。

(1) 検出遺構

掘立柱建物跡、土坑21基、溝8条、ピット(柱穴)361個

(2) 出土遺物

近 世：近世陶磁器(唐津・伊万里・瀬戸)

古 代：土師器(杯・皿)、須恵器(杯・皿・甕)

弥生時代：弥生土器(弥生時代後期後半)(壺・甕・甑)

3 平成21年度調査Ⅱ区(中世・古代) 調査面積 2,302㎡(延べ面積)

調査Ⅱ区は現在、上層の遺構を調査中です。Ⅱ区は昨年度いの町の町道改良工事に伴う発掘調査を実施したⅡ区に接し、調査区東部の丘陵谷部で中世(南北朝期)を中心とする遺構と遺物が確認されています。注目されるのは、断面V字形を呈した屋敷を区画する溝(SD2)であり、町道改良工事に伴う調査Ⅱ-1区で検出された溝の続きを確認しました。また、西部では平成20年度調査Ⅰ区で確認されている古代の遺構が検出されつつあります。出土遺物の中に鉄滓が多くみられ、鍛冶関連の施設が周辺にあった可能性が考えられます。

(1) 検出遺構(8月末現在)

掘立柱建物跡、土坑、溝、ピット

(2) 出土遺物(8月末現在)

中 世：土師質土器、瓦質土器、須恵器(東播磨系)、常滑焼、備前焼、青磁、石鍋、^{こうがい}笄など

古 代：土師器、須恵器、鉄滓

Ⅲ まとめ

今回の天神溝田遺跡の発掘調査では、弥生時代から近世にかけての様相が明らかとなりました。各時代の調査成果を以下にまとめてみたいと思います。

1 近世

天神溝田遺跡調査Ⅰ区で検出した近世の遺構は、出土遺物などから近世初期(江戸時代前期)の屋敷跡であることがわかりました。本年度調査で出土した瀬戸織部の向付皿は、今まで高知城跡と城下町でしか出土例がなく、貴重な資料です。当地域は、山内氏入国以後、郷士による新田開発が行われており、野中兼山の鎌田跡と高岡井筋、八田跡と弘岡井筋など農業用水建設(1648～)に伴い新田開発が発展していきます。今回の調査Ⅰ区で検出された屋敷跡は、出土遺物から見て郷士か庄屋クラスの人が生活していた場所としてとらえることができ、近世初期の集落構造を知る上で貴重な成果といえます。



調査 I 区上面遺構 (近世) 配置図 S:1/350

2 中世

調査Ⅱ区の東部で検出された遺構は、出土遺物から南北朝期(14世紀～15世紀前半代)が中心であり、その頃の生活の場所である事が明らかとなりました。また、15世紀後半以降になると墓地が造成されており、墓域に変化していることがわかりました。調査区の南側丘陵上には、音竹城跡が立地しており、出土遺物などから山城の機能時期や、生活空間の使用のされ方、変遷が明らかになりつつあります。

3 古代

平成20年度調査Ⅰ区及び、今年度調査Ⅱ区の西部では、平安時代後半(10世紀頃)の遺構と遺物が確認されています。検出された遺構はピットがほとんどですが、鉄滓などがまとまって出土しており、鍛冶関連の遺構が周辺に存在していた可能性が考えられます。

4 弥生時代

今年度の調査Ⅰ区の西部では、下層から弥生時代後期後半の土器が一括して廃棄された状態で見つかりました。当該期の土器は、天神遺跡で出土しているものと同じであり、周辺に生活域が展開していることが明らかとなりました。また、昨年度いの町の町道改良工事に伴う発掘調査でこれに先行する弥生時代後期中葉に位置づけられる土坑及び土器が検出されていることから、弥生時代中期末に展開する高地性集落のバーガ森北斜面遺跡から、丘陵裾の平野部への集落の変遷を追う事が出来ます。



上面遺構(近世)完掘状態(平成20年度調査Ⅰ区)



ピット(柱穴)22の巻き石(近世)



ピット(柱穴)187の椀状鉄滓(古代)



ピット(柱穴)7から出土した青花(中世)



SD2(溝)から出土した唐津灰釉皿



Ⅱ区上面遺構(中世)検出状況(現在調査中)



SD2(溝)から出土した織部向付皿



ピット(柱穴)から出土した土師質土器(中世)



下層遺構(弥生時代)検出状況



弥生土器出土状況



筈(こうがい)・中世



石鍋口縁部出土状態(中世)



SK25(土坑)から出土した青磁(劃花文・中世)



作業風景